

特60565

天草目録

松平伊豆頭	赤星内膳
板倉内膳正重政	四鬼丹波
北條安房守	中岡監物
勝花左近	波島直澄
十一時三弥	鹿子木左京
張馬壹岐	芦塚左内
室田頼母	芦塚忠太夫
天草四郎時貞	佐志木佐次右門
森宗意	天草四郎の母
駒木根八兵衛	
芦塚忠右衛門	
大矢野作左衛門	









松平伊豆頭

世人智恵伊豆頭

稱賛す天下執政の一個なり

幕府板倉をして賊徒征討を命じ

然るも數日よして尙未だ平定の報あり

之は常磐賊墨よ向ふと雖ども戦争を好まば口城を圍て

數日費すの諸軍も戦を促せども止せし示して曰く

比小城を攻るに大軍を以てさるゝ鶏をさくまいつくそを午

の力をを用ふことへのめ落城せんも容易ありとも今暫時籠城せし

糧尽まんその時進撃せし鎗刃を交へて平定の効あり

べしと夫より不日うつる落城せしめ全く伊豆頭の功あり



板倉内膳正重政

幕府島原の賊徒征討の

令を下し重

政を

以て

征討大將軍と

あし肥前の国へ出

兵せしむ



固より智勇の将あれども賊軍不

可思儀の謀計を以て之を防禦せし

を為し平定の効延引

す幕府細川伊豆守

を以て之を代りしゆんとい

重政遙よこれと聞て奮発

し時寛永十五年正月元旦自出

陣して大功ありし

北條安房守

小田原北條の支流より軍學あり府占してあり
て軍學あり府占してあり
軍學あり時よ島原の亂
あり
ことどもに
発は時よ



寛永十五年

二月島

原着陣



勝花左近



飛驒守が嫡子よして武勇絶倫の若大将あり
島原の賊 石花敵味方ハ驚うたこと

徒征討の命
を奉りて出陣

あー戦ふ毎まより

まら
ら
その

あう...

進退
電光



よも二月

六日敵

夜討よ

来る日

察し番卒よ令りて
敵を近づけ自らかどり
出て薙きつると飛鳥の



立諸
手一同
夜討を
あざんと
出とん

賊軍ふて
早くも此
ことや聞
たりん



十時三
勝花家名代の
老臣不しと
武勇
木畧

の長ざり賊
軍の内山右工門なるもの其
已れの母を助んと秘に寄
手へ内應な
し比が
持口を
聞えとを矢
文を以て通せし
り十時大い

十時三弥

勝花家名代の

老臣ホーて

武勇

才畧

小

の長せり賊

軍の内山田右工門あるもの其

已れの母を助んと 秘よ寄

手内應な し巴が

持口を

聞えことを矢

文を以て通せし

り十時大いさ



立諸

手一同

夜討を

あざんと

出ん

まなせ

ふ

賊軍ふて

早くも此

ことや聞

たり

ん



張馬壹岐

張馬家

普代の

老臣ふ

文武兼備の名士

あつり幕府の命ふ

應トて主君ふ

従ひ島原一出陣す

しるよよせてはせん



攻の皮討を仕とんト

諸手大ひふ苦えん

てれいまの

意中より

出るとちんハ

中務大輔易ら

ぬとに思ひ手

攻寄る

攻寄る





室田家の臣にして
 智勇衆不超へり
 諸侯原山の一番
 攻をせんトケル
 伊張間家の計
 策おて夜討を
 うけんといふを
 頼母とんこと
 止むれども

○衆
 乃し
 其の
 夜攻
 寄る

十



室田の頼母

室田家の臣にして
 智勇衆小超へり
 諸侯原山の一番
 攻をせんトける
 仲へ張間家の計
 策ふて夜討を
 うけんと云ふ事
 頼母これと
 止むれとも

衆
 止ま
 けす
 つひ
 其夜攻
 寄
 る



天草

四郎時貞

肥前島原領原村の庄官
 渡辺小左衛門の子あり
 其性活達衆童と異
 あり四才のかり
 無人島へ入りし
 異人あひ文武の道
 をまらび十年星霜を
 経てつひに本国へ
 くる其後島原一揆
 のとに總大将とあり



妖武両道不達
助武 額 峯の
浪人 肥前 未

昔塚と共おと
をたつて寺
沢せいを計りて
西方寺お引入

十一



水田家の田
宗意



文
 武
 両
 道
 の
 達
 人
 一
 行
 名
 譽
 の
 人
 一
 浪
 人
 一
 て
 肥
 前
 の
 未
 入
 田

廿
 塚
 の
 共
 々
 寺
 沢
 の
 計
 一
 西
 方
 寺
 の
 引
 入

十一



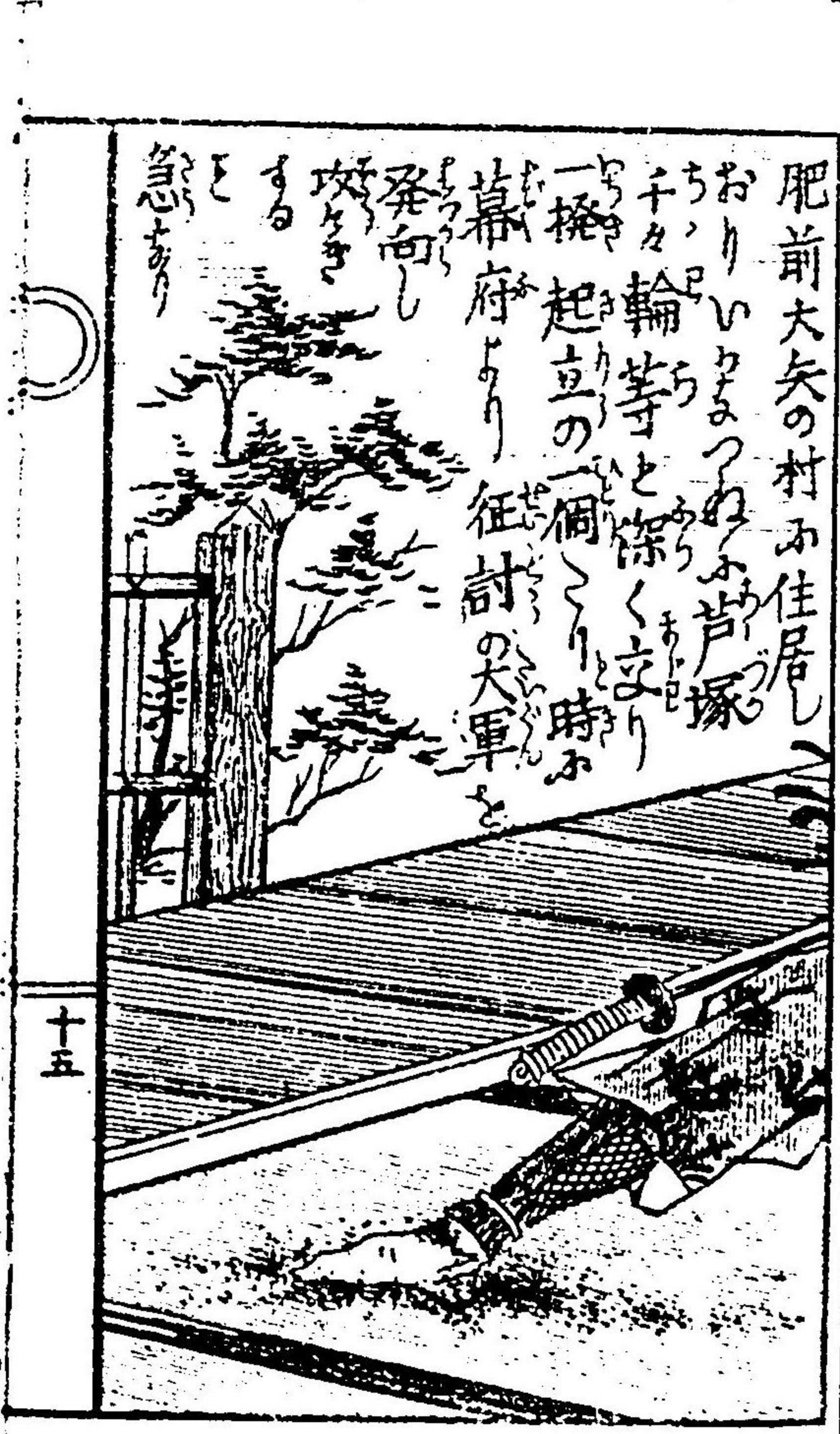
木
 林
 宗
 意
 小
 西
 家
 の
 臣
 一
 一





芦塚
忠右衛門
大阪の二将
主馬が張子
落城の後肥前
草島ふせん





肥前大矢の村に住居し
 おりいさまつぬふ戸塚
 千々輪等と深く交り
 一掃起立の個くり時ふ
 幕府より征討の大軍を
 發向し
 攻めき
 急を
 する



大矢野の
 作左工門
 本家の浪人
 武勇兼備
 の徳士あり



肥後加藤家の臣にして
 赤星内膳
 武勇衆ふ勝る剛士の
 名士あり浪人として諸國を徘徊
 あり肥前國にて戸塚天草某
 托すとす寛永十五年一揆一
 同寄手へ夜討





ありてあ
 老人の譽
 ありてあ
 毎ふ必ら
 騎先駈



中あ
 細川家
 監物
 一度も
 不覺も



信濃守

男

武勇絶倫の猛將
 将いりてさうら乳母
 魂つぎをいれぬ矢玉

上り
 それで
 中ると
 あし



波島宗次郎直澄



波島宗次郎直澄



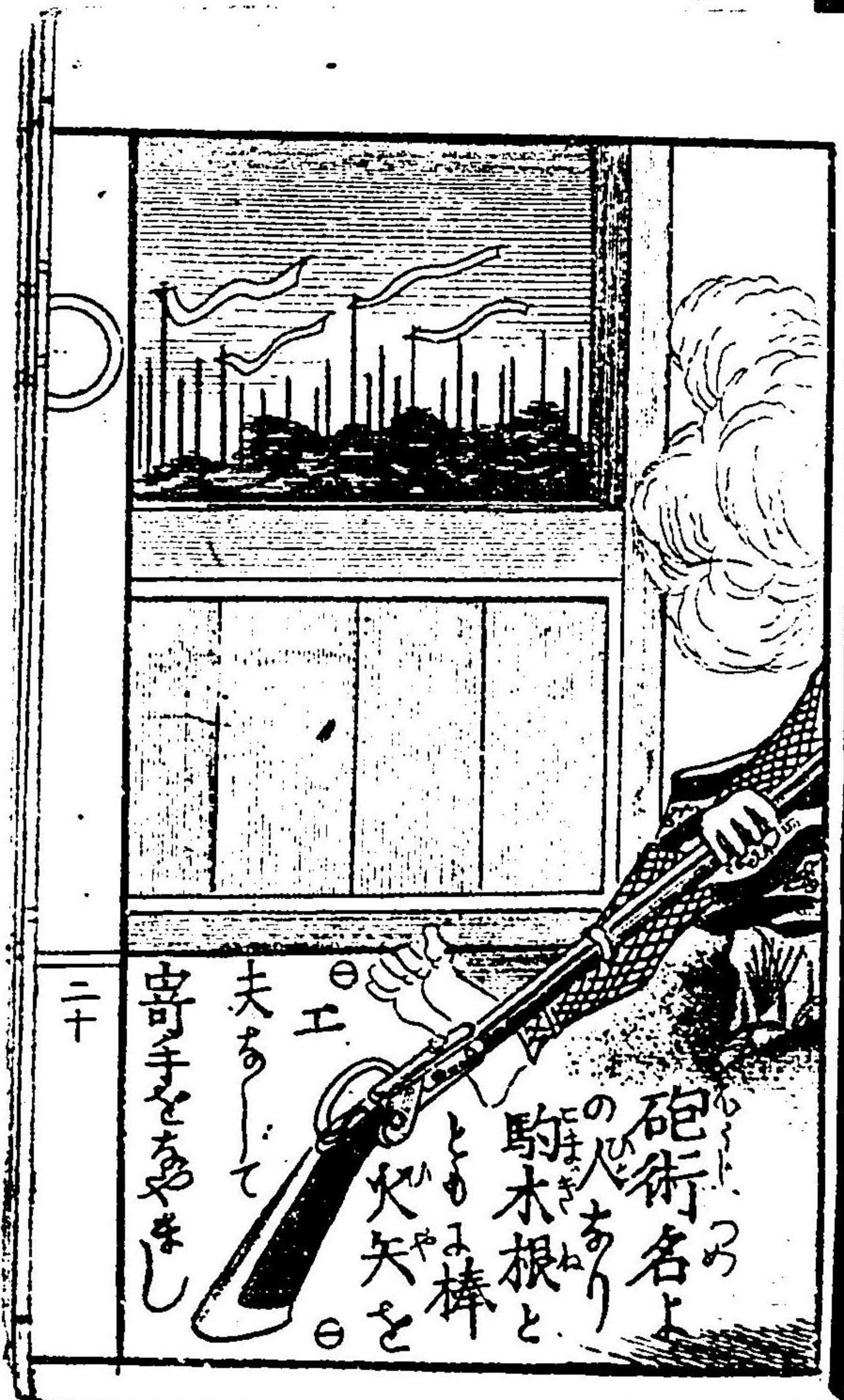
信濃守

騎次



武勇絶倫の猛
将よりとさう乳母
魂つをいれ矢玉

上り
をれて
中ると
あし





ふりふり

かま
かみ
たか
たか
たか
と
追
返

い
ざ
ん
と
酒
を
と
り

三十一



あ
の
つ
ら
さ
あ
い
芦塚左内
忠
左
門
ろ
子
ふ
り
て
武
勇
力
量
衆
を
超
へ
す
ど
の
ど
の
う
い
ふ
も
そ
の
を
と
ら
な
ば
万
人
を
ま
か
さ
す
か
ず
も
あ
る
ん
づ
と
落
城
の
刺
し
打
ち
こ
と



忠左衛門が勇あ
 武勇兄忠
 左衛門と共
 小一旗の
 土の
 早



城の
 原山の
 つひみ
 一
 城兵
 日時
 カゼ
 んト
 城の
 夜討打
 總大将の本
 城の
 こもり口陣へ討入り



佐志 木左 次右 工門 其祖 造寺 主家

めつ ぶく する ふ当

止む 元肥 前國 島原 村民 共仁 慕 小末 深江 名主



天草四郎の母

天草甚兵衛の妹よーと
 渡辺小左衛門が
 妻女と云ふ
 貞節列女の
 時小島原よて一棧起り
 一ふ子四郎其總大将
 と聞き夫小左衛門へ



一揆に組せむと
 年々其罪の重
 事なる
 此のまふの
 時石を抱て
 淵おのぞむより
 急心とて自ら老母を
 肥後へ落んと
 する船路徳川家へ
 いけどりとなり



明治十七年八月 日御届
同年同月 出版



日本橋区长谷川町壹番地

編輯兼出版人 武田平治

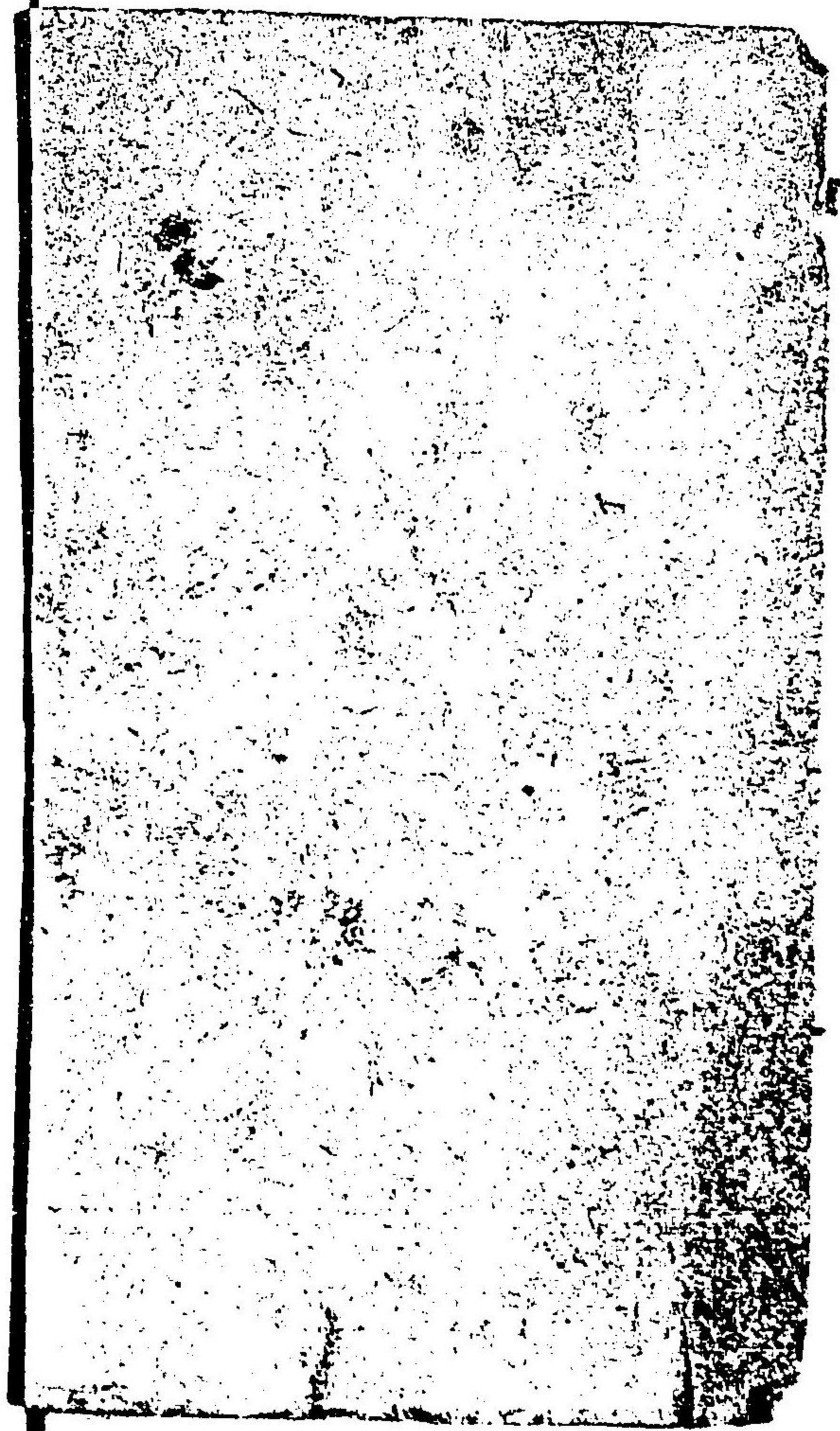
發兌

菱花堂

日本橋区葎町壹番地

同 金壽堂

金八



特60
565

091918-000-0

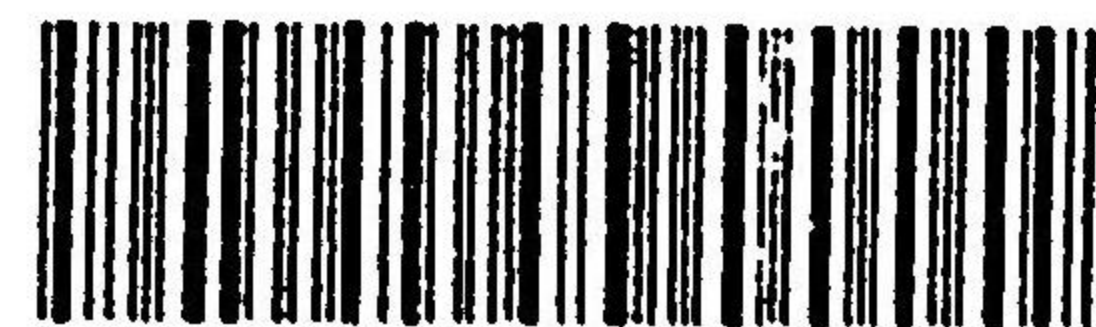
特60-565

天草戦争記

武田 平治 / 編

M17

DBP-0027



特 60

5th